

TAT 物語から見た内的作業モデル — 投映法による愛着スタイルの評定 —

内田 利広・古家 美穂*・小山 三奈子**

Internal Working Model from the Perspective of Thematic Apperception Test Narratives:
Evaluating Attachment Styles via the Projection Method

Toshihiro UCHIDA, Miho FURUIE*, and Minako KOYAMA**

Accepted June 27, 2012

抄録: 本論は、ボウルヴィの提唱した内的作業モデルの青年期における評定に関し、TAT を用いた評定方法について検討したものである。TAT 図版のなかから内的作業モデルの評定に適していると考えられる 6 枚を選択し、その反応の分類基準を作成した。さらに、その分類基準に基づいて TAT 図版より、被調査者を安定型、回避型、両価型に分類し、自尊感情や自己肯定感、さらには家族関係との関連を調べた。その結果、両価群において人間不信の得点が高く、家族関係では、安定群のほうが家族のきずな得点が高いことが示された。つまり、TAT 物語による内的作業モデルの評定の妥当性がある程度示された。さらに、TAT 物語による評定と、愛着スタイル尺度による評定を比べたところ、ずれが見られ、これはそれぞれが評定しているレベルが異なることが示唆された。つまり、TAT 物語においては、より無意識に近いレベルでの内的作業モデルを捉えていることが示唆された。

索引語: 内的作業モデル, 愛着スタイル, TAT, 評定, 投映法

Abstract: The present study investigated the use of the Thematic Apperception Test (TAT) to evaluate internal working model (IWM) of Bowlby's attachment theory during adolescence. Six illustrations considered suitable for the evaluation of the IWM were selected from TAT illustrations and criteria were established for classifying responses. Based on these criteria, survey participants were classified into three types: secure, avoidant or ambivalent style attachments, and relationships between style and family relationships, self-esteem and self-affirmation were investigated. The ambivalent style group scored high in distrust of others, while the secure style group scored high in bonds within family relationships. These findings demonstrate that TAT narratives are a reasonably valid method of evaluating the IWM. In comparing evaluations using TAT narratives and attachment style scales, deviations were observed indicating differences in rating levels. Specifically, the present findings suggest that TAT narratives perceive the IWM at a more subconscious level.

Key Words: internal working model, attachment styles, TAT, evaluation, projection method

* 千葉市児童相談所

** 八幡市福祉センター

1. 問題と目的

ボウルヴィ (1977, 1981) は、愛着の問題を乳幼児期に限らず、生涯発達の問題として捉え、その発現の仕方や様相は異なるが、青年・成人にとっても重要な問題であること、幼少期の愛着をめぐる経験から、内的作業モデル (Internal Working Models : 以下 IWM) が構成され、それが対人行動を規定すること、を指摘している。

IWM は発達早期の経験が表象モデルに取り込まれ、内的表象になったものであり、養育者からどのような養育を受けたかー敏感 (sensitive) で応答的な (responsive) 養育だったか否かーにより、養育者の近接可能性と応答性、および自分がそれに値するかに関して、異なった表象が構成される。それは、他者は自分の要求に対してどの位応じてくれる存在なのか、自分は他者からどの程度受け入れられている存在なのかという他者・自己の有効性に関する内的表象であり、対人的情報を処理する際の枠組みとなる。

ボウルヴィが IWM という概念を提唱して以来、臨床および発達分野で様々な研究がなされてきたが、特に青年期以降の IWM については、質問紙によってそれを捉えているものが多い。本来、IWM とは、無意識的な領域を含んだ個人の表象モデルであるため、質問紙法という意識レベルでの自己評価には限界があると考えられる。一方、面接によって個人の IWM スタイルを捉えるために、Main, M. によって開発された Adult Attachment Interview (以下 AAI) は、その手続きが公にはされておらず、習得にもかなりの時間を要するものである。

愛着史の記憶や対人関係の認識によって IWM が検討され、ボウルヴィ理論が実証されてきたのだが、これまでの研究でそれぞれの測定法が扱ってきた IWM 概念が必ずしも等質でないことを遠藤 (1992) が指摘している。詫摩・戸田 (1988) の質問紙では、一般的な自他対象という意味での IWM が扱われているのに対して、AAI では両親との関係、現在の対人関係への影響など包括的な表象が扱われている。IWM の分類に際しても、AAI では、思い出への近接容易性や語りの一貫性などといった、メタ的な評価に基づいて IWM の働き方が調べられているのに対して、質問紙では、自己評価結果がそのまま IWM の個人差として扱われている。今後 IWM 研究を進めるにあたっては、どの表象をどの次元で評価しているのかという問題に慎重になりながら、各結果の関連性を検証し、IWM 概念そのものを説明していくことが必要と思われる (久保, 2000)。

一方、主題統覚検査 (以下 TAT) は、Freud (1983) の「知覚のメモリーは、現時点での刺激の知覚に影響を与えている」という仮説に基づいている。そして Bellak (1971) は、統覚について「ある知覚についての主体の意味深き解釈」と定義している。つまり、個人にとっての新しい体験は、あらゆる個人的な過去の経験の残留物 (residuum) によって変容され意味付けられるのであり、「特定場面の知覚には、個人のそれに関わる特定の体験や先行するイメージ、そこから喚起される特定の感情が一時的に、しかし全体的に影響を及ぼしている」というのが TAT の基礎理論である。佐藤ら (2010) は、TAT 物語の持つ過去・現在・未来という時間展望の中で、包摂時間の長さに着目し、アイデンティティとの関連について検討している。つまり、長期的な未来展望を持つことができる人は、対人関係における他者との親密性の問題を適切に処理できるということであり、愛着とも関連することが考えられる。

ある特定のエピソード記憶や、類似のエピソード記憶が一般化された表象を下位構造として機能する IWM は、いわば「過去を通して現在を評価し、未来を予測する」モデルであり、この意味では、過

去体験や先行するイメージが現在の特定場面での知覚に影響を及ぼすという上記の統覚理論と対応していると言える（久保田，1993）。

また，TAT において，山本（1992）は「TAT 物語にあらわれる個人の人物像は，現実の対人関係におけるそれぞれ具体的な何人かの人物と短絡的に関係しているのではなく，様々な対人関係の問題を処理する際の，相手への反応のしかたや考え方など，語り手のもつ基本的かかわり方にもとづいてイメージ化された人物像なのである」と述べている。このことから，TAT 物語と IWM における概念の重なりが考えられる。

そこで，本研究では，成人における IWM 測定の方法として TAT を用いることの妥当性を検討する。そのために，まずは TAT への反応から生み出された物語に対し，IWM の視点から愛着スタイルを分類するための分類基準を検討する。さらに，その TAT 物語により分類された愛着スタイルの妥当性を検討するために，家族関係や自尊感情，自己肯定感との関連を明らかにする。以上のことを通し，IWM をより豊かに捉える試みとして TAT を使用することの意義について考察を行った。

2. 方 法

1. 調査対象者

京都教育大学において，筆者（内田）の担当する授業後に質問紙に回答してもらうことへの協力をお願いし，了解の得られた男女 145 名からアンケートを回収した。そのうち，記入等に不備のなかった 125 名を分析の対象とした。

2. 調査時期

- ・ 予備調査：2004 年 5 月 20 名
- ・ 本調査：2004 年 11 月及び 2005 年 5 月

3. 質問紙の構成

- (1) IWM 尺度：成人版愛着スタイル尺度（訖摩・戸田，1988）：「secure（安定）」「avoidant（回避）」「ambivalent（両価）」の 3 下位尺度があり，それぞれ 6 項目で全 18 項目から構成される。6 件法で回答を求めた。
- (2) 家族関係：FACES-KG-IV（立木，1999）：FACES-KG はオルソンら（Olson et al）が開発した FACES（Family Adaptability and Cohesion of Evaluation Scale）をもとに立木が日本の生活や文化に即して構成概念を検討して日本語版としての項目を作成したもので，信頼性・妥当性が確認されている。オルソンらのモデルは，家族の「きずな」（Cohesion）と「かじとり」（Adaptability）の 2 つの次元が家族機能を決定する上での中心概念と考え，両次元を組み合わせでモデル化している。
- (3) 自尊感情尺度（山本ら，1982）：ローゼンバーグにより作成された自尊感情尺度を山本らが邦訳したものである。10 項目について 5 件法で回答を求めた。
- (4) 自己肯定感尺度（平石，1990）：青年期の自己肯定意識の発達のあり方を検討するために作成されたもので，青年期特有の心性を反映させたものになっている。本研究では，対他者領域の「自己閉鎖性・人間不信」8 項目，「自己表明・対人的積極性」7 項目について 5 件法で回答を求めた。

(5) TAT

①検査図版の選択とその意義：TAT 図版，マレー版（Murray,1943），21 枚より特に自己や対象との関係が現れやすいと考えられる 6 枚（No1, 2, 5, 14, 15, 19）を抽出した（表 1）。この 6 枚を選択した理由は，以下のとおりである。

図版 1 は反応の失敗が少なく，検査への不安や緊張を和らげ，最初の導入として適切であると考えた。図版 2 では複数の人物が登場し，家族イメージが出やすく，3 者関係をどう捉えるかという視点がある。図版 14 ではポジティブな反応が多く，語り手の一人である内面の世界が表現されるのではと考えた。図版 15 では不安や恐怖といったネガティブな反応が多く，図版 14 の反応とのコントラストを見ることで，被調査者の希望の側面と孤独・恐怖といった側面への対処を見ることができる。図版 5・19 では母子関係が表現されることが多い。特に図版 5 では，覗き込むように見ている女性（母親）の意味付けやそれに対する不安・安心などが見られる。最後の図版 19 は，囲いという象徴により，基本的な母子関係のあり方や家族イメージなどが投影されるのではと考えられる。それぞれの図版への反応および 6 枚通しての反応の仕方を検討することで，IWM のタイプを評定する。

表 1 TAT 図版の特性＜山本（1992）より抜粋＞

図版 1	この図版はまさに導入図版としてふさわしい特徴を持っている。同一視しやすく，反応の失敗が最も少ない。被検査者の検査への不安，意気込み，緊張，自信などが物語の展開の中に二重映しとして出てくる。
図版 2	2 枚目で 3 人の人物がいる複雑な場面が示され，被調査者にとってはかなり緊張し戸惑う図版である。絵のちぐはぐさに敏感な人は，絵の細部にこだわったり，前の女性と背後とを全く関係の無いものとしたりする。そこに，強迫傾向や固執性の傾向や人間関係の葛藤の処理の仕方がでやすいことになる。テーマの出現の仕方について，3 人の人物で 1 つの物語が作られることがこの絵に仕込まれている課題である。大体が家族イメージに関するものである。時には男女の三角関係のテーマもでてくる。また，前面の若い女性と背後の 2 人との世界がどうしても結び付けられないこともある。
図版 14	「希望図版」と呼ぶことがある。この窓の明るさが，未来の希望を象徴しているように語られることが多いからである。特に黒い世界がこれまでの苦労や，閉じ込められた世界を象徴し，そこから開放されていく感じが窓について語られる。1 人である方が楽な人はこの絵を好む。内面の葛藤，野心，希望，生活設計が良く出る。一人であるときの語り手の内面の世界が良く出てくる。
図版 15	自分の中の攻撃的欲求の処理の仕方をよくここで見るができる。愛する人や頼れる人を失って一人孤独になった物語を引き出すこともある。また，孤独，死に対する不安，老いに対する恐怖がテーマになって出てくることもある。図版 14 の男性があごをやや上に向けて前向きの感じを示しているのに対し，それに続く図版 15 はあごを引いた過去を見つめる雰囲気をかもしだしている。この 2 つの図版は，1 人である内面の世界が続けて出されることが多い。両方の図版で作られる物語の雰囲気のコントラストを見るのも大切である。
図版 5	母親的な世界を中心とする家族全体の雰囲気が触発されるように組まれている。この部屋の中に導入されてくる人物とのぞいている女性との関係や情感の流れなどが物語の雰囲気と構造を決めていく。特に離人体験を持つ人は，寒々とした空虚感とひんやりとした雰囲気を示す人が多かった。家族内の緊張，不信，不安を暗示させるとも考えられる。

図版 19	語り手の母親との基本的関係（basic relation）をよく示す物語が作られると見ている。「母子基本関係図版」と呼んでいる。ここで語られる物語が、小屋のまわりが雪や嵐であっても小屋の中にほのぼのと温かいものがあればほっとさせる。それに対して、冷え冷えとしていたり、廃墟であったり、大火事で燃えている時は、母子の基本的関係に重大な問題があると考えられる。これまでの図版で作られた母子関係の物語に示されてきた母子関係の構造の断片が、この図版で創られる物語によって象徴的に基本構造を浮かび上がらせてくれる。また、家や船、潜水艦、時には鯨のお腹の中といった囲いが登場する。その「囲い」の象徴的特性と雰囲気は、物語の中の母親イメージを暗示させる。TAT の画面にとらわれ、感情移入できないまま物語を作ってきた人にとっては、この図版 19 はどうしていいかわからないものになる。「だれか有名画家の描いた絵」「抽象画」という反応に終わり、イメージが出てこない。それ自体、母との関係において基本的に問題があることを暗示させる。その場合、語り手の感じるこの場面の雰囲気について一言聞いておくといい。
-------	--

4. 手続き

授業中の一部を利用し、TAT に関しては「これから 6 枚の絵をお見せします。それぞれの絵について、絵を見て、そこから感じることをもとに自由にお話をつくってください。そこにいる人が何を感じ、何をしているのかを含んだ物語を作り、回答欄の番号に合わせて、記入してください。」という教示文と図版のコピーの載ったアンケート用紙を配布し、そこから感じることをもとに物語を作成し、絵の下空欄に自由記述として回答をお願いした。さらにそのアンケートには、IWM 尺度、家族関係尺度、自尊感情尺度を綴じてあり、それも合わせて回答をお願いした。

5. 評定方法

ボウルヴィ（1977）や高橋（2002）の IWM タイプ（secure/avoidant/ambivalent）に関する記述を参考に、まず予備調査（20 名）において得られたデータを基に、筆者ら 3 名の合議によって各図版に共通する視点を抽出し、分類基準を作成した（表 2）。IWM に対応する形で安定型・回避型・両価型としている。6 枚のうち 3 枚以上の反応があった者を分析対象者として、図版ごとにその記述内容から安定・回避・両価のいずれに該当するかを評定した後、6 枚の図版を通しての被調査者の最終的なタイプを評定する。

表 2 TAT 物語の分類基準

安定型	・図版と内容との間に整合性がある（極端な内容でない） ・negative な内容と positive な内容の両方が語られている ・図版から感じ取られる negative な刺激を自然に捉え、語る事ができている
回避型	・反応量が少ない ・negative な刺激から目を背けて反応しない、または理想化する ・ギャグ調にごまかす、脚色する ・関係性に言及せず、ばらばらに要素を語る ・状況説明のみで感情表現がない ・「~のよう」「~みたい」とぼかし、距離をとる
両価型	・不安感や不安全感が強く語られている ・negative な刺激に過度に反応し、極端な内容である ・自分の感情や葛藤をかきたてられ、図版の性質以上に過剰に反応する（絵から離れた表現）

3. 結果と考察

1. TAT 評定の結果

初めの被調査者 80 名について、筆者ら 3 人が評定基準に基づき、それぞれで評定を行った。その後、基準に照らし合わせながら 3 人で合議して、評定基準を再度確認しながら、最終の評定を行った。その合議の作業において、3 名の評定基準の認識がより確かなものになってきたので、残りの 45 名については各々で評定、その後 3 名の一致した評定（人数の多い評定）を最終の評定結果とした。一致率は、前半 80 名においては 71%，後半の 45 名については 83%，全体で 78%であった。TAT 評定の最終的な結果を表 3 に示す。

表 3 TAT 評定結果（人）

安定	回避	両価	合計
74	28	23	125

2. TAT 物語における各群の典型例

TAT 物語の分類基準により、各群に評定された被調査者の TAT 物語の典型例を示す。

(1) 安定群における TAT 物語の典型例（表 4）

安定群の典型例として、図版 2 においては、3 人の人物で 1 つの物語が語られており、主人公の感情が自然な形で表現されている。図版 5 においては、主人公の状況が語られるとともに、少しさびしい思いと嬉しさの感情が両面から語られている。図版 19 では、冬の寒さと対照的に家の中のあたたかさが表現されている。つまり、positive な側面と negative な側面が両面からとらえられている。

表 4 安定群における TAT 物語の典型例

図版 2	被調査者 No.20	彼女は裕福な家庭に育ったので、世間知らずである。学校の帰り道に農作業を行う夫婦を見て、何か自分のすんでいる世界にはない魅力にちょっとした憧れをいだいている。また、農婦が妊娠しておなかが出ていることに、生命の神秘のような、前述とは異なる、女性としての憧れのような、興味のようなものを感じている。
図版 5	被調査者 No.36	ケガをして部屋に迷い込んできた鳥を看病していた。少しずつ回復し、もう離してもいい時がきた。窓をあけ、鳥をはなつと、青い空へ勢いよく飛び出していった。青い空の中へすい込まれたように消えていく鳥を見て、少しさびしい思いと元気に飛び立っていったうれしさを感じている。
図版 19	被調査者 No.133	とても寒い地域の冬の景色。家には雪が積もっていてとても寒いですが、家の中には暖炉があつてとても温かい様子の絵である。

(2) 回避群における TAT 物語の典型例（表 5）

回避群の典型例として、図版 2 においては、背景の人物を絵画の世界として切り離しており、感情の交流や関係性の言及が見られない。つまり、negative な刺激から目を背けて、関係性には触れずに、バラバラの要素として語られている。そして図版 5 では、非常に短い文になっていて、反応量が少ない。また、状況説明のみで、感情表現が見られない。図版 19 では、ギャグ調の表現でごまかしたり、

脚色をして、図版への言及をぼやかしている。

表 5 回避群における TAT 物語の典型例

図版 2	被調査者 No.80	先生が絵画の前に立って子ども達の方を向いている。まだ授業は始まっていなくて、生徒が全員集まるのを待っているところ。
図版 5	被調査者 No.108	屋上へ出ていくところ。
図版 19	被調査者 No.18	これが 2000 年後のせかいなのかー。タイムスリップ、フューチャー。

(3) 両価群における TAT 物語の典型例 (表 6)

両価群の典型例として、図版 2 では、母親に対する不安感が強く語られている。図版 5 では、ポジティブな反応が多い図版に対して、極端にネガティブな反応が示されている。図版 19 では、図版から離れた極端な表現が見られ、ネガティブな刺激に過度に反応し、不安感が語られている。

表 6 両価群における TAT 物語の典型例

図版 2	被調査者 No.17	とても裕福な家庭、しかし、家族のつながりは極めてうすい。少女は、なんとかして母の目にとまりたかった。一生懸命勉強して、よい成績をおさめれば、母はこっちを向いてくれるだろうか。
図版 5	被調査者 No.120	少年は空を飛びたくてしかたありませんでした。そしてロウで作った羽で飛び立ちましたが、ロウが溶けて落ちて死んでしまいました。
図版 19	被調査者 No.10	粘りつくような闇は濃く、ただぐるぐるとうずを巻き、ただその空に停滞する。何かがいそうなその夜に、人は外に出てはならない。もしも命がおいしいなら、屋根からのぞくその影を知ろうなどとはしてはいけない。灯る明かりの中にいて、夜の闇を見てはならない。外にある闇は夢だから。ただ留まり続ける夢だから。粘る闇はくりかえす悪夢。何をしてもおわらぬ悪夢。忘れ得ぬ想い。

3. TAT と自己意識、家族関係との関連

TAT の評定より分類された 3 群 (安定・回避・両価) を独立変数、自尊感情尺度および自己肯定感尺度の 2 因子 (人間不信・自己表明) を従属変数として、分散分析を行った (表 7)。その結果、自己肯定感尺度における「人間不信」では、有意差が示された。下位検定の結果、両価群が安定群より人間不信が高いことが明らかになった。

表 7 TAT 評定 3 群における自尊感情, 自己肯定感の得点

(人数)	T A T			F 値	
	安定群 (74 名)	回避群 (28 名)	両価群 (23 名)		
自尊感情	33.6 (7.80)	32.75 (7.00)	31.03 (6.69)	0.44	n.s.
自己肯定感					
人間不信	19.76 (6.72)	21.04 (6.66)	23.27 (5.20)	3.96	** 両>安
自己表明	24.07 (5.12)	24.18 (4.71)	22.08 (3.18)	0.78	n.s.
() 標準偏差				** P<.01	

次に, TAT の評定により分類された 3 群 (安定・回避・両価) を独立変数, 家族関係尺度の 2 因子 (きずな・かじとり) を従属変数として, 分散分析を行った (表 8)。分析の結果, 家族関係尺度の「きずな」で有意な差が示され, 下位検定の結果, 安定群が両価群・回避群よりきずなが強いことが示唆された。

表 8 TAT 評定 3 群における家族関係の得点

(人数)	T A T			F 値	
	安定群 (74 名)	回避群 (28 名)	両価群 (23 名)		
家族関係					
きずな	5.13 (4.78)	2.68 (3.93)	2.30 (5.88)	4.62	** 安>両・回
かじとり	-0.61 (1.65)	-0.14 (2.80)	0.41 (1.99)	2.06	n.s.
() 標準偏差				** P<.01	

以上のように, 自己肯定感尺度における人間不信では, 安定群に対し両価群の得点が高く, 家族関係では, 安定群が回避群や両価群に対して, きずなの得点が高いことが明らかになった。これは, 安定群が対人関係や家族関係をより肯定的に捉えているという IWM の理論とも一致している。TAT を用いた本研究の評定手続きが IWM との関連性もある自己肯定感や家族関係との間に, 何らかの関連を持っていることが示唆され, TAT を用いた IWM の評定の妥当性がある程度支持されたと考えられる。

4. TAT と愛着スタイル尺度との関連

次に, TAT への反応の評定により分類された 3 群 (安定・回避・両価) を独立変数とし, 愛着スタイル尺度の 3 因子 (secure・avoidant・ambivalent) の得点を従属変数として, 分散分析を行った (表 9)。つまり, これは TAT による愛着スタイルの評定と, 愛着スタイル尺度による愛着スタイルの評定とを, 直接比べてみることである。

表 9 TAT3 群における愛着スタイル得点の差

		T A T			F 値	多重比較
		安定 (74 名)	回避 (28 名)	両価 (23 名)		
愛着スタイル	secure	22.22 (5.18)	23.18 (4.69)	21.17 (4.95)	1.00	
	avoidant	16.16 (5.08)	17.29 (5.48)	18.57 (4.34)	2.12	
	ambivalent	18.55 (4.95)	19.89 (3.74)	20.78 (4.59)	2.35	+安<両

数値は平均値, () 内は標準偏差 + : < .10

TAT の評定による各群の愛着スタイルの得点を見ると, まず TAT 安定群は愛着スタイルの secure 得点が比較的高く, avoidant, ambivalent 得点是他群と比して低い様相が, また TAT 回避群は secure 得点が高く, avoidant, ambivalent 得点も中程度に高い様相が, TAT 両価群は secure 得点が低く, avoidant, ambivalent 得点が高い様相が見てとれ, TAT と愛着スタイルとの関連性がある程度うかがえる。ただし, 検定の結果としては ambivalent 得点における群差 (安定群<両価群) のみであった。その他は有意な関連はみられず, 愛着スタイル尺度によって捉えられる愛着スタイルと, TAT によって捉えられる愛着スタイルとは, 完全には重なり合うものではないことが示された。

これについては, 意識レベルで回答する愛着スタイル尺度という質問紙法と, 無意識レベルを含んだ投射法である TAT との差異が考えられる。特に TAT 回避群においては, 図版の negative な刺激に対してギャグ調でごまかしたり脚色したりして理想化する特徴があり, そうした防衛的方略によって, 愛着スタイル質問紙においても理想的な回答をし, secure 得点が高くなったということも考えられる。

5. TAT による評定と愛着スタイル尺度による評定が異なるケースの検討

本研究においては, TAT により成人の IWM 評定を試みたが, その結果は, IWM 尺度得点とかなり関連を持っているが, 一部では異なるケースがあった。しかし, これはむしろ TAT という投射法と, IWM 尺度という質問紙法という手法の違いによる部分が大いなのではと考えられる。そこで, TAT による評定と愛着スタイル尺度による評定が異なるケースについて, 検討してみることにする。

(1) TAT 評定は回避型であるが, 愛着スタイルは secure 型のケース

典型的な回避型に比べてしっかりとしたストーリーはあるが, 文末で「～のように思える」「感じがする」「雰囲気がある」等, 距離をとるような表現となっている。また, ギャグ調の表現が目立ち, 真意を覆い隠そうとする傾向がある (表 10)。つまり, 対人関係, 対自己関係において, 無意識的に距離をとり, 真意を隠し, ごまかしてうまくやる傾向があるので, 一見安定した IWM を形成しているように見える可能性がある。

表 10 TAT が回避型、スタイル尺度が secure 型の被調査者の具体例

被調査者 No. 56	図版 2	「手前の女性は、何か悩みをかかえ、何かを見つめている、 <u>と言った感じがする。とは別に、おくの女性は馬をあつかう男の監視もしくは、夫を上目から見ている女王様気分の女性のように思える。</u>
	図版 14	黒すぎて分かりにくいですが、男性が部屋をくらくして、明るい（夜）外をせつなくみていそうな感じがする。「心に悩みを抱えながらも、明るい未来へ飛びたとうとする気持ちから足をだしている <u>ように思える。</u>
	図版 15	何か固くて暗いたにかこまれ、悲しくかつ冷たい表情をしている <u>ように思える。手を合わせていることから目に見えない何かにしばられているように思える。背を落とし、肩も落としていることから、落ち込んでいるのでは？「僕はここから出られないのか〜」</u>

被調査者 No. 30	図版 2	ジェニファーは学校へ行く途中です。「なんであのオッサンはだかやねん。」不思議に思いました。
	図版 14	「夜になったし窓しめな。蚊が入ってくるわ」といいながらジョニーは窓を閉めました。
	図版 15	父親の墓前にて。。。「私、身も心も女の子になりましたの」と報告にきました。

(2) TAT 評定は両価型であるが、愛着スタイルは secure 型のケース

図版 14 のようにネガティブな要素の強い刺激に対しては、両価的な過剰な反応をするものの、図版 5 や図版 15 のようなレベルの刺激には、比較的安定的な表現をする。

基本的には安定的な IWM を形成しているように見えるが、不安や葛藤等ネガティブな刺激の強い状況においては、より不安感を感じ、困惑する可能性がある（表 11）。

表 11 TAT が両価型、スタイル尺度が Secure 型の被調査者の具体例

被調査者 No. 67	図版 5	「あら、出かけたのかしら。宿題ちゃんとしていったのかしらね。」
	図版 14	「やっとう光が見えた！！」僕の心はこれまで真っ暗。決して笑顔をふるまうことなんてできやしなかった。先生のおかげで、僕はやっとう光のある地へふみだすことがいまこそ叶う！！。
	図版 15	天涯孤独のダニーじいさん。彼は、本当に孤独でした。彼は死んでからも誰の心の中に残ることもなければ、誰にも最後をみとってもらえないことにぞつぼう感を感じています。せめて、埋葬だけでも誰かにしてほしい・・・。

被調査者 No. 101	図版 5	「どこにいるの？チャーリー、どこー？」母は息子を探している。しかし、家のどこにもいない。「チャーリー、いいかげんにしなさいよー」。そのころチャーリーは、家の外にうまく出ていた。「よしっ！！いこうっ！！」チャーリーとポールは家を背にかけだしていった。
	図版 14	ついに脱出できた。男は、今までの苦しい生活からようやくのがれたのだ。まっくらなところからの脱出。しかし、まっくらな所にすぎたせいか、明るすぎて何もみえない・・・。
	図版 15	老人は許してもらおうと必死だった。1人で真夜中に墓地に出かけ、妻のもと（墓石）へいった。「ゆるしてくれ、ゆるしてくれ、あのことはなかったことにしておくれ・・・」それから老人は、毎日墓地へ出かけるようになった。

最近の青年期・成人期に関するアタッチメントの評定に関する研究には、大きく 2 つの流れがあると言える (Simpson & Rholes, 1998)。1 つは、友人あるいは恋人や配偶者などの現在の主要なアタッチメント対象との関係性の実態とともに、あるいはそれ以上に、過去における自己と養育者との関係性に関する記憶表象を重視する。その主たる測定方法が AAI であり、個人の過去の養育者との関わりに関する語りの構造に、無意識的に、その個人のアタッチメントに関する情報処理の特異性、すなわち、内的作業モデルの質が反映されていることを仮定している (遠藤, 1992, 2006 ; Hesse, 1999)。もう 1 つの流れは、親友や恋人あるいは配偶者など、基本的に個人が選択的に構築しうる現在の関係性の実態を問題にしている。そこでは、アタッチメントおよび内的作業モデルの概念が、種々の対人関係領域に通底する、共通の基本枠として応用されることになるが、そこに親子関係の視点は相対的に希薄である。その主たる測定方法は自己報告的な強制選択法あるいは多項目の質問紙法であり、個人の無意識的過程に焦点を当てる AAI に対して、どちらかと言えば、個人が意識的に想起しうる関係性の側面を把握しようとするところに大きな特徴があると言える (遠藤, 2006)。

以上より、質問紙評定による IWM と TAT 物語の分析による IWM にずれが生じることは、測定するレベルに違いがあるため、当然の結果である。TAT 物語による IWM は、愛着スタイル尺度により捉えられる IWM よりも、より無意識的な側面の IWM を測定していることを示唆している。

本研究において TAT 物語から IWM を測定しようとする試みが、ある程度妥当であることが示唆されたことで、アタッチメントの評定においては、より AAI に近い無意識的な IWM が反映される測定法の可能性を見出せた。今後は、より豊かに個人の IWM を反映する TAT 物語による IWM の測定方法を整理・改善し、さらには臨床場面への活用を検討したい。

4. まとめ

TAT への反応を用いて IWM を捉えることについて、自己肯定感尺度・家族関係尺度との関連から、その妥当性がある程度うかがえた。刺激画からストーリー (物語) を作ることで、自己および他者に対する表象が、特にネガティブな刺激への反応や、刺激画の中の対人関係への言及によって、投影されている。

TAT 物語と愛着スタイル尺度との関連より、TAT で捉える IWM と愛着スタイル尺度で捉える IWM は、ある程度関連はあるものの完全には一致しないことが示された。

TAT による評定と愛着スタイル尺度による評定が異なるケースを検討したところ、愛着スタイル尺度において secure 傾向が高い人の中に、無意識的には avoidant, ambivalent の要素を強くもつ人もいた。このことは、愛着スタイル尺度という質問紙法における一つの限界を示すものであり、個人が意識的に想起しうる対人関係の評定においては、どこかで防衛的になり、より望ましい方向に反応する傾向があると考えられる。

以上より、個人の IWM を捉えるために TAT を用いることで、質問紙では扱えられない無意識レベルでの表象を捉えることができ、また、その語りの内容を見ていくことで、より豊かに IWM を捉えられる可能性がある。青年期以降の愛着表象を調べる方法として、TAT を用いた投映法的手法の有効性が確認できた。今後は、IWM の個人差をより反映した刺激画の厳選や、より具体的な評定基準の整理など、測定法としての改善を試み、臨床場面への活用の可能性を検討していきたい。

文 献

- 遠藤利彦 (1992). 愛着と表象—愛着研究の最近の動向：ワーキングモデル概念とそれをめぐる実証的研究の概観. 心理学評論, 35, 201-233.
- 遠藤利彦 (2006). 語りにおける自己と他者, そして時間：アダルト・アタッチメント・インタビューから逆照射して見る心理学における語りの特質. 心理学評論, 49, 470-491.
- 久保恵 (2000). 愛着表象の投影法的研究—親子状況刺激画を用いて. 心理学研究, 70, 6, 477-484.
- 久保田まり (1993). 絵画統覚検査による幼児のアタッチメントの内的ワーキング・モデルに関する基礎的研究. 秋田経済法科大学経済学部紀要, 20, 73-96.
- Simpson, J.A. & Rholes, W.S. (Eds.) (1998). *Attachment theory and close relationships*. New York: Guilford Press.
- 佐藤裕樹・岡本祐子 (2010). 大学生におけるアイデンティティの確立と時間的展望 --TAT 物語にみられる時間的統合の観点から. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 9, 54-66.
- 高橋正泰 (2002). 母子関係の心理アセスメント—愛着行動に関する検討. リハビリテーション心理学研究, 30, 15-29.
- 詫摩武俊・戸田弘二 (1988). 愛着理論からみた青年の対人態度—成人版愛着スタイル尺度作成の試み—. 東京都立大学人文学報, 196, 1-16.
- 立木茂雄 (1999). 家族システムの理論的・実証的研究—オルソンの円環モデル妥当性の検討. 川島書店
- 平石賢二 (1990). 青年期における自己意識の発達に関する研究 (1) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討. 名古屋大学教育学部紀要—教育心理学科, 37, 217-234.
- Freud, S. (1983). Totem and taboo. In A.A. Brill(Ed.) *Basic writing of Sigmund Freud*. New York: Modern Library.
- Hesse, E. (1999). The adult attachment interview: Historical and current perspectives. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications* (pp.395-433). New York: Guilford Press.
- Bellak, L. (1971). *The TAT and C.A.T. in clinical use (2nd ed.)*. New York: Basic Books.
- ボウルビィ, J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977). 母子関係の理論Ⅱ—分離不安—. 岩崎学術出版社 [Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, vol.2, Separation : Anxiety and anger*. New York: Basic Books.]
- ボウルビィ, J. 黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子 (訳) (1981). 母子関係の理論Ⅲ—愛情喪失—. 岩崎学術出版社 [Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss, vol.3, Loss : Sadness and depression*. New York: Basic Books.]
- Murray, H.A. (1943). *Thematic apperception test: Manual*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.
- 山本和郎 (1992). 心理検査 TAT かかわり分析—ゆたかな人間理解の方法. 東京大学出版会
- 山本真理子・松井豊・山成由起子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造. 教育心理学研究, 30, 64-69.